

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：26201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10966

研究課題名（和文）訪問看護師の多職種協働による地域看取りケアの振り返り支援教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Education program to facilitate reflecting on their end-of-life care among Visiting Nurses and community-based health care team

研究代表者

岡田 麻里（Okada, Mari）

香川県立保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：90534800

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：地域を基盤とする多職種チームで看取りの振り返りをするデスカンファレンスを実施には、時間的・物理的・知識や技術不足等の多くの困難がある。そのような状況の中で、多職種チームで振り返りを開催した理由や得られた学びを明らかにすることは意義がある。本研究の目的は、地域を基盤とする多職種チームのデスカンファレンス開催理由とそこで得られた学びを明らかにすることとした。8名の訪問看護師と1名の退院調整看護師を対象「看取りケア後に多職種で振り返りをした印象に残る事例」「振り返りを実施することになった経緯」、「多職種チームで振り返りを実施したことによって得られた学び」について半構造化面接法を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多職種チームによる看取りの振り返り開催理由は【看取り後に沸き起こる負の感情をチームで語り合う場の確保】、【場/職種が異なることで見えない本人と家族の姿・思いの共有】、【多職種チームの語り合いによる看取り成功体験の言語化】、【在宅看取りを可能にする多職種チーム/体制づくりの探究】、学びは【その人の生きざを通じた人間の尊厳に対する畏敬の念】【不消化な感情の言語化によるチームメンバーへの共感】等が抽出された。時間的・物理的・負担等、困難な状況が多い中でも、多職種チームによる看取りの振り返りの実施は、チームメンバーのメンタルヘルスを保ち、地域における質の高い看取りケアの実践につながる。

研究成果の概要（英文）：There are many difficulties in conducting a death conference in which a community-based multidisciplinary team reflect on their end-of-life care. The purpose of this study was to clarify the reasons for holding a death conference by community-based multidisciplinary team and the learnings there. Eight visiting nurses and one discharge coordination nurse were subjected to semi-structured interviews, "What is the impressive or unforgettable case for you?", "How to decide to conduct the reflection among the team?", "What did you learn?"

研究分野：地域・在宅看護学

キーワード：看取り 地域 在宅 訪問看護師 多職種チーム 振り返り デスカンファレンス

1. 研究開始当初の背景

日本は世界に類を見ないスピードで高齢社会が進み、多死社会時代を迎えようとしている。国は、地域包括ケアを打ち出し、暮らしの場での看取りを推進しており、国民の7割は自宅/居宅を死亡場所として希望しているにもかかわらず、実際は8割が病院で死亡している（厚生労働省、2017）。この国民の希望と実際の死亡場所との乖離を埋めるために、在宅ケアの要である訪問看護師には、家族支援（長尾、2015）、在宅緩和ケアの実践能力（廣岡ら、2016）、ターミナルケア態度やスピリチュアルケア（近藤ら、2016）、療養者の意向を表出させるコミュニケーション力（鶴若ら、2016；池口、2016）等、高度な力量が求められる。さらに、死に向きあうための死生観（彦ら、2010；藤本、2013）、看護倫理観（平山ら、2015）が求められる。しかし、訪問看護師は、家族のグリーフケアへの困難（岡本ら、2018）、死の教育不足等の課題を抱え、学習の場や連携の場（平川ら、2014）が必要である。

地域における看取り体験は、家族だけでなく、訪問看護師を含む支援に関わった多職種にとっても身体的・精神的負担が大きい。患者の死後、不全感（安成、2014）、困難感・ジレンマを感じる（瓜崎ら、2018）ことが報告されている。ターミナル期の患者をケアする看護師のメンタルヘルスに関する課題が指摘され、その予防のためにケアを振り返るデスカンファレンスの教育的有用性（桂川、2016）、意義（広瀬、2010）が報告されている。とりわけ、地域における多施設・多職種によるデスカンファレンスは、多職種の対話による相互理解と連携の強化、今後の実践につながる気づき、思いの表出等、多くの意義（和泉ら、2012；大谷ら、2012；大賀、2017）が報告されている。彦ら（2010）は、死生観の形成や専門職として成長するためには、経験年数や勤務場所の異なる看護師や多職種チームとして学びを共有する場の重要性を述べている。そのため、在宅終末期ケアの知識や技術を学ぶ研修のみならず、自己の看取り実践を多職種と共に振り返り、体験を共有する場が必要である。しかし、診療報酬が付かない中で、多機関所属の多職種が一堂に振り返りの機会をもつことは難しい。

訪問看護師を対象とする教育プログラムは、在宅終末期ケアや緩和ケアに必要な技術や知識を習得するものに焦点が当たっている（岩城、2012；菅野ら、2014；小野、2016；森本ら、2017；桶河ら、2018）。しかし、訪問看護師が多職種ともに対象の死後、お互いの感情を共有し、終末期ケアを振り返る教育プログラムはない。工藤ら（2016）は約3割の訪問看護ステーションがデスカンファレンスを実施していると報告しているが、多職種によるものかは不明である。さらに、多職種によるデスカンファレンスは、ファシリテーションの難しさ、職種間の対話の壁等の障害により（大賀ら、2017）、開催は困難を極めている。ゆえに、自己の看取りケアを振り返り、互いの体験を共有し、連携を強化するための教育プログラムを開発する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域を基盤とする多職種チームのデスカンファレンス開催理由とそこで得られた学びを明らかにすることとした。これらの結果を通して、多職種による地域看取りケアの振り返りに基づく教育プログラムの開発について検討することとした。

3. 研究の方法

1) 研究参加者の選定

研究者の機縁により訪問看護ステーションや訪問看護師等が所属する連絡会や訪問看護師のネットワークに呼びかけ、研究参加者を募った。本研究の参加者の選定要件は、本研究の趣旨を理解し、看取りケア後に事例の支援をした多職種チームで振り返りをした経験のある訪問看護師・退院調整部門の看護師とした。事例の情報や在宅ケアの状況、入院中か退院し在宅至った経過から最期亡くなるまでの状況、カンファレンスの場面で他の職種の語りを詳細に記憶し振り返って語れる者を本研究の対象とした。

2) データ収集

半構造的面接法を用いた。「看取りケア後に多職種で振り返りをした印象に残る事例」「なぜ本事例の看取り後に多職種チームで振り返りをすることになったのか」「印象に残る他の職種の語りはどのような内容であったか」等とした。インタビューガイドを作成し、あらかじめ研究参加者に送付した。面接はコロナ禍の状況を考慮しオンラインを活用した。時間は約60分間とした。内容は許可を得て、録音し逐語録を作成した。基本情報として、看護師経験年数、認定・専門看護師等の資格、所属する訪問看護ステーション等の概要、事例の概要について記載を求めた。

3) データ分析

本研究の目的を明らかにするための分析の視点は「なぜ、看取りケア後に多職種チームによるカンファレンスが開催されたのか(多職種チームでカンファレンスを開催した理由は何か?)」「その振り返りで印象に残った他の職種の語り」「得られた学びは何か」とした。語られたデータの意味をコード化し、共通点や相違点を比較検討しながら、共通する意味ごとにサブカテゴリー化、カテゴリー化し、抽象度を高めた。語られたカンファレンスには、訪問看護師が呼びかけとファシリテートで開催されたもの、病院の緩和ケアチームが主催で実施されているもの、行政保健師の呼びかけとファシリテートで開催されたものがあった。全ての事例は訪問看護師が参加しチームからキーパーソンであることが認識されていた。事例の疾患や本人の性格や家族構成等による特徴、在宅ケアチーム主催か、病院の緩和ケアチーム主催で実施されたカンファレンスか等の視点からも共通点や相違点等、研究者間で検討し分析を進めた。

4) 倫理的配慮

所属機関の倫理審査委員会に研究計画書を提出し承認を得た（承認日：令和2年8月31日：承認番号：326）。研究参加者に、研究の趣旨説明書、同意書、同意撤回書等を郵送した。研究参加者の勤務時間等の希望を配慮し日時を設定した。面接を始める前に、本研究の趣旨、時間は60分間程度要すること、ICレコーダーで録音すること、個人情報の保護の上で研究結果は学会等で公表すること等を説明し、同意書にサインを得た。感染予防配慮のためオンラインによる面接とした。

4. 研究成果

1) 開催理由

なぜ、地域を基盤とした多職種チームで看取りの振り返りをするようになったのかを意味するカテゴリーは、4つが抽出された。

(1)【看取り後に沸き起こる負の感情をチームで語り合う場の確保】

このカテゴリーは、本人が亡くなった後に支援者に込み上げてくる負の感情を共に関わった多職種チームで吐き出し、語り合い、共有するために開催したことが語れた。

(2)【場/職種が異なることで見えない本人と家族の姿・思いの共有】

このカテゴリーは、生前の本人と家族の姿や思い、エンゼルケアの様子、遺族訪問の際に語られた家族の言葉や様子等を、ケアに関わった訪問看護師や各職種だけに留めるのではなくチームで共有し、さらには、退院後の在宅生活の様子を知らない病院スタッフと共有するために、開催したことが語られた。

(3)【多職種チームの語り合いによる看取り成功体験の言語化】

このカテゴリーは、看取り後にチームで“いい事例だった”、“自分たちもやり切った”と認識され、“チームで語り合いたい”という達成感を共有したいという思いが高まり開催されたことが語れた。

(4)【在宅看取りを可能にする多職種チーム/体制づくりの探究】

このカテゴリーは、本看取り事例の体験から多くの学びを得ることができたと確信し、これらの学びを多職種チームで共有することで、次の看取り事例のチームづくりに活かしたい、さらには独居でも希望すれば地域で看取りを支援する体制づくりにつなげたいという思いから開催したことが語れた。

2) 多職種チームによる看取りの振り返りから得られた学び

多職種チームによる看取りの振り返りから得られた学びは、4つのカテゴリーが抽出された。

(1)【その人の生きざまを通した人間の尊厳に対する畏敬の念】

このカテゴリーは、故人の在宅ケアから亡くなるまでのその人の生きざまをチームで振り返ることを通し、人間の尊厳や死を通して故人に畏敬の念を感じることである。

(2)【不消化な感情の言語化によるチームメンバーへの共感】

このカテゴリーは、当初は語れなかった思いや腑に落ちない思いを振り返り、言語化することで、チームメンバーからの共感を得ることで語った本人は納得感を得ることである。すなわち、語れた本人は自己の感情の客観視につながり、共感したメンバーは他者理解につながった。これらを、事例に関わったチームで行うことによって癒しを得ていた。

(3)【振り返りを基盤とする多職種メンバーの実践への承認と評価】

このカテゴリーは、専門職としての自己の役割や在り方について振り返り、チームメンバーからの承認を得る場とし、自己の至らなさに対して自ら気づき直す機会とすることである。多職種チームとして、専門職として、本人や家族にとって意向に則したケアであったかを深く考えることで、自ら成長する機会としていた。

(4) 多職種チームの対話を基盤とする地域看取り力の探究

このカテゴリーは、事例を中心とする多職種チームが看取りの振り返りをする対話を基盤とし、次の事例に向けての課題と解決方法を見出すことである。チームの対話は納得感と信頼関係を築き、誰もが人生の最期まで住み慣れた地域で暮らし自分らしい最期を迎えられる地域づくりの土台として、とらえられていた。

以上のカテゴリーは、地域を基盤とする多職種チームによる看取りの振り返りを促す基礎資料となる。また、本研究結果は、誰もが住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる地域包括ケアシステムづくりを推進する教育の基礎資料となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡田麻里, 片山陽子, 小出恵子, 尾形由起子
2. 発表標題 多職種協働による地域看取りケアの振り返りを促す技術－訪問看護ステーション管理者の語りから－
3. 学会等名 第4回日本在宅連合学会大会（神戸）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田麻里, 片山陽子, 小出恵子, 尾形由起子
2. 発表標題 多職種チームで看取りケアの振り返りを促す要因と振り返りの意味
3. 学会等名 第27回日本在宅ケア学会学術集会（東京）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田麻里, 片山陽子, 小出恵子, 尾形由起子
2. 発表標題 遺族が参加した多職種チームによる地域看取りケアの振り返りの場づくりとその意味
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会 第5回学術集会（東京）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田麻里, 片山陽子, 小出恵子, 尾形由起子
2. 発表標題 多職種協働の地域看取りケア振り返りの促進要因
3. 学会等名 日本地域看護学会第25回学術集会（富山）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田麻里, 片山陽子, 小出恵子, 尾形由紀子
2. 発表標題 多職種チームによる地域看取りケアの振り返りー訪問看護師の印象に残った事例から得られたチームの共有内容ー
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会(広島)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	片山 陽子 (Katayama Yoko) (30403778)	香川県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (26201)	社会的な動向や国際的な視点等、最新の知識に基づく助言や支援を得た。
研究分担者	尾形 由起子 (Ogata Yukiko) (10382425)	福岡県立大学・看護学部・教授 (27104)	フィールドや研究参加者の紹介など、研究推進のための支援・助言を得た。
研究分担者	小出 恵子 (Koide Keiko) (40550215)	四天王寺大学・看護学部・准教授 (34420)	データ分析、結果の解釈など、論文作成に関する助言・支援を得た。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------